

# The Date of Composition of the *Śrīvajraṃḍalālamkāra* and Its Position in the History of Indian Tantric Buddhism

by TANAKA Kimiaki

The *Śrīvajraṃḍalālamkāra nāma mahātantrarāja* preserved in the Tibetan Kanjur has traditionally been classified as a Yoga Tantra and has been regarded as one of the longer versions of the *Prajñāpāramitānaya-sūtra*. Although there is no complete Chinese translation, it has long been known that the *Jingangchang zhuangyan banruo boluomiduo jiao zhong yifen* 金剛場莊嚴般若波羅蜜多教中一分 (Taishō no. 886), translated by Dānapāla, corresponds to the final section of the *Śrīvajraṃḍalālamkāra*. Hitherto this tantra has received the attention of Japanese researchers primarily as an alternative version of either the shorter or longer version of the *Prajñāpāramitānaya-sūtra*. Through an examination of quotations in other texts and parallel passages shared with other tantras I have reached the conclusion that this tantra can be dated to the second half of the eighth century. Worthy of particular note is the existence of more than ten verses shared with the opening section of the *Sarvabuddhasamāyoga*, one of the earliest Mother Tantras, and there is a strong possibility that the *Śrīvajraṃḍalālamkāra* has taken these verses from the *Sarvabuddhasamāyoga*. This indicates that the *Śrīvajraṃḍalālamkāra*, a Yoga Tantra, postdates the *Sarvabuddhasamāyoga*, a Mother Tantra (albeit one of the earliest) belonging to the Highest Yoga Tantras. Although a large number of later Yoga Tantras are preserved in the Tibetan canon, the original Sanskrit text of none except the *Sarvadurgatipariśodhana-tantra* has survived. Consequently their importance has been underestimated, but there is a need for further research on these tantras in order to elucidate the development of Indian Tantric Buddhism.

# 『金剛場莊嚴タントラ』の成立と インド密教史上における位置

田中公明

## [1] はじめに

『チベット大蔵経』のカンギュルに収録される『金剛場莊嚴タントラ』<sup>(1)</sup>は、伝統的に瑜伽タントラに分類され、『理趣広経』の異本とも見なされてきた。漢訳『大蔵経』には対応する完訳はないが、施護訳『金剛場莊嚴般若波羅蜜多教中一分』（大正 No.886）が、その末尾部分に対応することは夙に知られており、経題に付記された「此於大部支流別行」<sup>(2)</sup>の「大部」が『金剛場莊嚴タントラ』を意味することも、広く承認されている。

本タントラに関しては、梅尾祥雲が『理趣経』の異本として『理趣経』各段の経文と『金剛場莊嚴タントラ』の対応する部分を比較したのが、最初の本格的な研究といえる<sup>(3)</sup>。さらに酒井眞典は、本タントラ所説の八大仏頂曼荼羅について紹介し<sup>(4)</sup>、本タントラを『金剛頂経』十八会の第七会「普賢瑜伽」に比定した<sup>(5)</sup>。

いっぽう『理趣経』の研究をライフワークとする福田亮成教授は、チベット訳に基づいて同タントラの構造を分析するとともに、施護訳と対応するチベット訳の比較を試みた<sup>(6)</sup>。また福田教授は、プラシャーンタミトラの『金剛場莊嚴大タントラ細疏』<sup>(7)</sup>についても、冒頭の清浄句の解釈を中心に概観している<sup>(8)</sup>。

このように本タントラは従来、真言宗系の研究者によって、主として『理趣

経』あるいはその広本である『理趣広経』の異本として注目されてきた。またその成立の下限は、『細疏』の作者であるプラシャーンタミトラの活躍時期とされてきた。とくに梅尾祥雲は、寂友（プラシャーンタミトラ）は不空三蔵と同時代であり、「此の経は少なくとも不空三蔵時代には已に成立し、不空三蔵もその梵本を請来せられたであろうと想像し得るのである。」<sup>(9)</sup>と述べ、その成立を不空が多量の梵本を携えて帰朝した746年以前に遡らせている。酒井真典が本タントラを『金剛頂経』の第七会に比定したのも、このような梅尾の見解を承けたものと思われる。

『金剛頂経瑜伽十八会指帰』（以下『十八会指帰』と略）によれば、「普賢瑜伽」の説処は「普賢菩薩宮殿」<sup>(10)</sup>とされている。ところが『金剛場莊嚴タントラ』は、説処を「光明無辺の法界宮殿、般若波羅蜜樓閣」*chos kyi dbyiñs kyi khañ bzañ 'od mtha' yas pa/śes rab kyi pha rol tu phyin pa'i gtsug lag khañ*<sup>(11)</sup>としている。また『十八会指帰』は第八会「勝初瑜伽」を、「稍廣於第七會說。大略同」<sup>(12)</sup>と説いている。ところが酒井が第八会に比定した『理趣広経』「真言分」と『金剛場莊嚴タントラ』を比較すると、文献量では「真言分」の方が浩瀚であるが、『理趣広経』と内容的に一致するのは冒頭の「一切如来の法門」*de bzin gśegs pa thams cad kyi chos kyi sgo*<sup>(13)</sup>のみで、他の部分はほとんど一致を見ない。しかも「一切如来の法門」と一致するのは、酒井が第八会に比定した『理趣広経』「真言分」ではなく、第六会とされる「般若分」の方である。これに対して筆者は、第七会を『理趣広経』のチベット訳のみに存する「真言分」の前半部分と考えている<sup>(14)</sup>。

また『ターラナータ仏教史』によれば、プラシャーンタミトラはブッダジュニャーナパーダの弟子で、アビダルマ・般若波羅蜜・下部の三種タントラに善巧であったとされる<sup>(15)</sup>。羽田野伯猷にしたがって、ジュニャーナパーダの活躍年代を750年から800年頃<sup>(16)</sup>とすると、プラシャーンタミトラは、その1世代後となり、同タントラが不空帰朝の746年までに成立していたことは保証され

ない。したがって『金剛頂経』の第七会を『理趣広経』『真言分』の前半に比定する筆者の説の当否はさておき、『金剛場莊嚴タントラ』を第七会とするのは無理があるように思われる。

そこで本稿では、『金剛場莊嚴タントラ』を、8世紀から9世紀に成立したと考えられる他の仏教文献と比較することによって、その成立年代とインド密教史上における位置を再検討してみたい。

- 1 Śrī-vajra-maṇḍalāṃkāra-nāma-mahātantrarāja (北京 No.123)
- 2 大正 No.886, Vol.18, 511b.
- 3 梶尾祥雲『理趣経の研究』(高野山大学, 1930年)
- 4 酒井真典「八輻輪曼荼羅」(『酒井真典著作集』第三卷, 1985年) pp.264-268.
- 5 酒井真典『酒井真典著作集』第三卷(1985年)「あとがき」p.306.
- 6 福田亮成『理趣経の研究－その成立と展開－』(国書刊行会, 1987年) pp.113-133.
- 7 Śrī-vajramaṇḍalāṃkāra-mahātantra-pañjikā (北京 No.3338)
- 8 福田上掲6)書 pp.220-226.
- 9 梶尾上掲3)書 p.32.
- 10 大正 No.869, Vol.18, 286b.
- 11 北京 Vol.5, 195-1-4.
- 12 *ibid.*, 286c.
- 13 北京 Vol.5, 193-1-1～201-2-3.
- 14 拙著『インド・チベット曼荼羅の研究』(法蔵館, 1996年) p.206.
- 15 D.Chattopadhyaya: *Tāranātha's History of Buddhism in India*, Simla 1970, p.279.
- 16 羽田野伯猷「秘密集タントラにおけるデニャーナパーダ流について」(『羽田野伯猷チベット・インド学集成』第1巻[法蔵館, 1987年]) p.46.

## [2] 成立年代と他のテキストの引用

インドの密教は、8世紀から9世紀にかけて劇的な展開を見せる。7世紀の時点では、三部立ての組織をもつ初期密教の儀礼・印言・尊格体系を整理統合し、体系化した『大日経』が有力であったが、8世紀に入ると、五部立ての組

織をもつ『金剛頂經』系が大発展し、インド密教の主流を占めるようになる。さらに9世紀に入ると、『金剛頂經』系の中から『秘密集会』『サマーヨーガ』などの無上瑜伽タントラが発展し、インドは後期密教の時代に入る。

したがって初期密教系の所作タントラ、『大日經』系の行タントラ、『理趣經』『初会金剛頂經』系の瑜伽タントラ、後期密教系の無上瑜伽タントラは、この歴史的順序で成立したと考えられる。この認識は今日でも基本的に承認されているが、瑜伽タントラと無上瑜伽タントラに関しては、両者が相互に影響を及ぼしつつ、並行して発展した一時期があったと推定される。

『金剛場莊嚴タントラ』は、基本的に『理趣經』系の瑜伽タントラに属するが、後述のように、初期の後期密教聖典である『秘密集会』や『サマーヨーガ』を参照している箇所が見受けられる。したがって『金剛場莊嚴タントラ』の成立年代を明らかにすることは、単に一テキストの成立史を解明するだけでなく、密教が劇的に展開した8世紀から9世紀のインド仏教の状況を明らかにすることにつながるのである。

それではまず、『金剛場莊嚴タントラ』を引用する密教論書を概観しよう。

このうちラトナーカラグプタ作『三昧耶王成就法』（『サーダナマラー』No.2）の引用は、福田教授の分科では第6章に相当する「一切如来の称讃の王」の後半部分<sup>(1)</sup>に、ほぼ完全に対応するチベット訳を見出すことができる。なお『ターラナータ仏教史』によると、ラトナーカラグプタはパーラ朝のネーヤパーラ *Neyapāla*/*Nyāyapāla* 王と同時代とされている<sup>(2)</sup>。同書に基づくネーヤパーラ王の在位年代は1015-1050であるが、M.H.Shastri が *Rāmacarita* に基づいて復元した王統譜には、ネーヤパーラ王の名が見られない<sup>(3)</sup>。これに対して Huntington 夫妻による王統譜では、ナヤパーラ *Nayapāla* 王の在位期間は1042-1058とされている<sup>(4)</sup>。

いっぽうインドラプーティの『智慧成就』 *Jñānasiddhi* の第15章にも、śloka で8偈半に及ぶ引用が見られる。これについては高橋尚夫教授によって、本タ

ントラの第12章「般若波羅蜜多の成就法」に、ほぼ対応する一節があることが明らかにされている<sup>(5)</sup>。

また『秘密集会』聖者流の『行合集灯』*Caryāmelāpakapradīpa*にも1偈のみの引用が見られる<sup>(6)</sup>。なおこの引用は、福田教授の分科では第9章に対応偈を見出すことができる<sup>(7)</sup>。さらに同一偈が、出典を明らかにすることなくラヴィシュリージュニャーナの『文殊師利真実名経註』*Amṛtakanikā-ṭīppanī*にも引用されている<sup>(8)</sup>。同書は『時輪』の立場から『真実名経』*Nāmasaṅgīti*を註したものである。

このうち『三三昧耶王成就法』の引用は、*Vajraṃḍalālaṃkāramahāyogatantra*とあり、本タントラがmahāyogatantra、すなわち初期の無上瑜伽タントラと同じ呼称で呼ばれていることは注目される。

『金剛場莊嚴タントラ』を引用する文献のうち『智慧成就』と『行合集灯』は、最初期の母タントラ『サマーヨーガ』を『サンヴァラ』の名で引用しており、8世紀後半から9世紀前半の成立と推定される。しかもこれらの引用は、現行のチベット訳にはほぼ対応している。したがって同タントラが不空が帰朝した746年までに成立していたことは保証できないが、8世紀後半には成立していたと見てよい。これは前節で見たブラシャーンタミトラの師、ブッダジュニャーナパーダの活躍年代に一致する。

さらに『三三昧耶王成就法』の引用から、『金剛場莊嚴タントラ』が11世紀まで行われたことが知られるが、ラヴィシュリージュニャーナが活躍した12世紀後半<sup>(9)</sup>には、インドで、しだいに忘れ去られるようになっていたと推定される。

1 北京 Vol.5,207-3-1～3-4.

2 Debiprasad Chattopadhyaya: *Tāranātha's History of Buddhism in India*, Simla 1970, p.310.

- 3 頼富本宏『密教仏の研究』（法藏館，1990年）pp.580-581.
- 4 S.L.and J.C.Huntington:*Leaves from the Bodhi Tree*, The Art of Pala India, Dayton 1990, p.542, chart I.
- 5 高橋尚夫「Jñānasiddhi 第15章－和訳－」（『豊山教学大会紀要』第5号，1977年）p.100.
- 6 *Caryāmelāpakaṇḍikā*, Sarnath, 2000, p.31.
- 7 北京 Vol.5, 210-5-1～2.
- 8 *Nāmasaṃgīti with Amṛtakaṇikā and udyota*, Sarnath 1994, p.20.
- 9 ラヴィシュリージュニヤーナは、『時輪』系の *ṣaḍāṅgayoga* の創始者 Anupamarakṣita より 4 世代後とされる（『梵語仏典の研究』Ⅳ [平楽寺書店, 1989年] pp.339-340）から，その活躍年代は12世紀後半となる。

### [3] 四仏母と八女尊

密教聖典の成立を考察するには，漢訳・チベット訳の訳出年代や文献間の引関係の他に，そこに説かれる尊格群の構成や印・真言などを比較する方法がある。『金剛場莊嚴タントラ』には，複数の曼荼羅と多数の成就法が説かれているので，この手法はとくに有効である。

このうち本タントラの第12章<sup>(1)</sup>には，女性尊の成就法が集中して説かれている。なお福田亮成教授は，本章を「般若波羅蜜多の成就法」と呼んでいるが，これは女性尊のうち，最初に説かれる尊格が般若仏母であるからである。しかし正確には，1. 般若仏母をはじめ，2. 仏眼・3. 白衣・4. ターラー・5. 毘俱胝 Bhṛkuṭī・6. マーマキー・7. 金剛鎖 Vajraśṛṅkhalā・8. 准提 Cundā と，都合8尊の女性尊が説かれている<sup>(2)</sup>。

このうち2. 仏眼・3. 白衣・4. ターラー・6. マーマキーの4尊は、『秘密集会』の四仏母と同一である。『金剛場莊嚴タントラ』所説の真言も『秘密集会』「第十四分」に説かれる四仏母の真言と全同ではないが，ほぼ一致しており，本タントラが『秘密集会』を参照していることは動かしがたい。さらに本タントラ

は、四仏母に5. 毘俱胝・7. 金剛鎖・8. 准提を付加しているが、このうち毘俱胝には、同じ『秘密集会』「第十四分」所説の毘俱胝の真言<sup>(3)</sup>が転用されている。

そしてターラーの後に毘俱胝を置いたのは、インドの観音三尊像で、両者が観音の両脇侍になるためと思われる。同様にマーマキーの後に金剛鎖を置いたのも、胎藏曼荼羅等で金剛手の左右にこれら2女尊が配される<sup>(4)</sup>ことを念頭に置いたものと推定される。

なおこれに類した女尊群が、『マーヤージャラ・タントラ』<sup>(5)</sup>に説かれている。同タントラは『秘密集会』と『初会金剛頂経』を合成した曼荼羅を説くため、無上瑜伽・瑜伽の何れに分類するかについて異説がある。

同タントラ所説の曼荼羅の中心部は、『秘密集会』と同じ五仏・四仏母からなるが、阿閼ではなく毘盧遮那が主尊となる点が異なっている。また第二院の四方には『初会金剛頂経』系の四波羅蜜、四維には准提・宝光 Ratnolkā・毘俱胝・金剛鎖の四女尊が配される。これらの四女尊は他に類を見ないが、『金剛場莊嚴タントラ』所説の8女尊を『マーヤージャラ』の四仏母・四女尊と比較すると、般若仏母と宝光が入れ替わるだけで、他の7尊は一致することがわかる。

なお宝光 Ratnolkā は、同名の有名な陀羅尼を尊格化した女性尊である。『金剛場莊嚴タントラ』の8女尊は宝部の女尊を欠いていた<sup>(6)</sup>ので、『マーヤージャラ』は、曼荼羅を構成するに当たって般若仏母の代わりに宝光を入れたと思われる。なお川崎一洋氏は、これら四女尊を「有名な陀羅尼の題名と一致する」<sup>(7)</sup>としたが、陀羅尼經典として篤く信仰されたのは准提と宝光の2篇のみで、毘俱胝・金剛鎖の陀羅尼が広く信仰を集めた形跡は見られない。

また准提・宝光・毘俱胝・金剛鎖の四女尊には、相互に密接な関係を見出すことができないが、『金剛場莊嚴タントラ』の8女尊の配列は、観音三尊・金剛手三尊の構成を念頭に入れると合理的に説明することができる。

したがって『金剛場莊嚴タントラ』は、『マーヤージャラ』の曼荼羅に影



響を及ぼしたと見るのできるのである。

なお『マーマージャラ』については、『金剛頂経』系の瑜伽タントラから『秘密集会』への発展過程にあると見なす見解（松長有慶博士）と、『秘密集会』以後の成立と見る見解（川崎一洋氏）が並び立ち、いまだ意見の一致を見ていない<sup>(8)</sup>。しかし『マーマージャラ』の四女尊が『金剛場莊嚴タントラ』の影響下に成立したとするなら、これは川崎説に有利となる。後述のように『金剛場莊嚴タントラ』には、『秘密集会』だけでなく、最初期の母タントラとされる『サマーヨーガ』の影響も見られるからである。

- 1 北京 Vol.5, 214-5-7～216-2-4.
- 2 なお福田教授は、仏眼と白衣の間に「蓮華のマンダラ成就法」を挿入するが、これは白衣の成就法の中に現れる「蓮華曼荼羅の成就法」 pad ma'i dkyil 'khor sgrub pa'i thabs の語を、章題と誤ったものである。
- 3 松長有慶『秘密集会タントラ 校訂梵本』（東方出版、1978年）p.67.
- 4 現図曼荼羅では、マーマキーが金剛手持金剛に置き換えられ、金剛鎖は第2列に配されている。現図以前の胎藏旧図様、阿闍梨所伝曼荼羅等を参照されたい。
- 5 *Māyājāla-mahātantrarāja-nāma*（北京 No.102）。なお『マーマージャラ』にはニンマ派が伝える旧訳本もあるが、本稿では新訳本のみを扱う。
- 6 *Niṣpannayogāvalī*, No.20によると、『マーマージャラ』所説の文殊金剛四十三尊曼荼羅第二院の四女尊は、それぞれ准提（如来部）・宝光（宝部）・毘俱胝（蓮華部）・金剛鎖（羯磨部）に属し、宝光の代わりに般若仏母（如来部あるいは金剛部）を含めると宝部の女尊が欠けてしまう。川崎一洋氏は「『幻化網タントラ』の構造－曼荼羅を中心として－」（『密教文化』198号）において、宝光が宝部の女尊を補うために採用されたと正しく推定しているが、女性尊の宝光 Ratnolkā を、男性尊である胎藏曼荼羅地蔵部の宝処 Ratnākara と同一視するのは正しくない。
- 7 松長有慶編『インド後期密教』[上]（春秋社、2005年）p.89.
- 8 川崎一洋氏は上掲6）論文では、松長説にしたがって『幻化網』（マーマージャラ）を『初会金剛頂経』と『秘密集会』の中間に位置づけたが、「『幻化網タントラ』に見られる五秘密思想」（『密教文化』211所収）では、『幻化網』（マーマージャラ）が『秘密集会』を引用していると指摘した。これに対して大観慈聖氏は「ラトナー

カラシャーンティ註『クスマーンジャリ』にみる『秘密集会タントラ』の構成について」（『密教文化』216所収）において、川崎説を批判している。

#### 〔4〕『金剛場莊嚴タントラ』と『サマーヨーガ』

インドでは9世紀頃から、『金剛頂経』系の密教が発展して後期密教の時代を迎える。後期密教には『秘密集会』を中心とする父タントラと、『ハーヴァジュラ』『サンヴァラ』を中心とする母タントラの2系統がある。このうち母タントラは、中世インドで最も流行した密教聖典群であるが、8世紀から9世紀前半に成立した初期の後期密教文献には、現在のサンヴァラ系タントラは知られておらず、その前身である『サマーヨーガ・タントラ』<sup>(1)</sup>、正式名称 *Sarvabuddhasamāyogaḍākinījālasaṃvara* が『サンヴァラ』と略称されていた。

このタントラは、酒井眞典によって『金剛頂経』の第九会に比定され、福田亮成教授<sup>(2)</sup>と筆者<sup>(3)</sup>により、『チベット大蔵経』所収の続タントラ *uttaratantra* から、『十八会指帰』の第九会の記述に一致する一節が発見された。したがって不空が帰朝した746年までに、その根幹をなす部分が成立していたと見られる。

なお筆者が明らかにしたように、『サマーヨーガ』の曼荼羅は『金剛頂経』の第八会「勝初瑜伽」に比定される『理趣広経』「真言分」の各段所説の曼荼羅を合成した構成であり<sup>(4)</sup>、『理趣広経』と『サマーヨーガ』の間には複数の同一偈や類似偈が存在することが知られている。しかしこれらの同一偈は後半の「真言分」に集中しており、その生起は散発的に過ぎない。

ところが『金剛場莊嚴タントラ』には、『サマーヨーガ』の第1章第1偈から第17偈の *pāda ab* まで、10数偈に互って同一偈が並ぶ箇所が見出される<sup>(5)</sup>。

いっぽう『サマーヨーガ』と後のサンヴァラ系タントラには、教理や曼荼羅の構造に大きな差違が見られるが、『サマーヨーガ』とサンヴァラ系の中心を

なす『ラグサンヴァラ』<sup>(6)</sup>には、冒頭の1偈半のみが共通するという奇妙な符合が認められる<sup>(7)</sup>。さらにサンヴァラ系の釈タントラとされる『ヴァジュラダーカ』<sup>(8)</sup>や、ヘーヴァジュラ・サンヴァラ両系共通の釈タントラとされる『サンブタ』<sup>(9)</sup>にも、『サマーヨーガ』との同一偈が数多く見出される。

このような事実から、現在のサンヴァラ系は、当初『サンヴァラ』と呼ばれていた『サマーヨーガ』を意識しつつ、その内容を換骨奪胎して9世紀後半以降に成立したと推定される。

これらの後期密教聖典は『金剛頂経』系の発展形態であり、『金剛頂経』『理趣経』直系の瑜伽タントラより、成立が遅れると見られてきた。しかし『秘密集会』『サマーヨーガ』等、『十八会指帰』に言及された後期密教聖典は、不空が帰朝した746年までに、その中心部分が成立していたと見なければならない。

いっぽう瑜伽タントラに分類されても、『十八会指帰』に対応するものがなく、吐蕃時代の旧訳も存在しないテキストは、これら初期の後期密教聖典より成立が遅れる可能性がある。

したがって『サマーヨーガ』と『金剛場莊嚴タントラ』の同一偈に関しても、それを詳細に比較することにより、両者の先後を決定する必要がある。そこで『サマーヨーガ』と『ラグサンヴァラ』『サンブタ』『ヴァジュラダーカ』『金剛場莊嚴タントラ』の間に見られる同一偈・類似偈を、表に対照させて考察することにしよう<sup>(10)</sup>。(表参照)

表からも明らかなように、『サマーヨーガ』の冒頭部分に関しては、『金剛場莊嚴タントラ』の方が、『ラグサンヴァラ』『サンブタ』『ヴァジュラダーカ』より『サマーヨーガ』によく一致する。また『金剛場莊嚴タントラ』は、『サマーヨーガ』の第1章第7・第9・第10偈を欠くいっぽう、『サマーヨーガ』の第13偈の pāda c と d の間に1偈、第16と17偈の間に半偈を挿入していることがわかる。

このうち第2偈の pāda cd は、『サマーヨーガ』の経題自体を偈にしたもの

であるが、『ラグサンヴァラ』と『ヴァジュラダーカ』は、この部分を他の句に差し替えている。いっぽう『サンプタ』は、pāda ab と cd の間に2偈半を挿入している。これに対して『金剛場莊嚴タントラ』は、第1偈から第6偈の pāda c まで『サマーヨーガ』とほぼ同文になっている。なお Sarvabuddhasam-āyogaḍākinījālasaṃvara という術語は『金剛場莊嚴タントラ』の他の章節には現れず、この部分が『サマーヨーガ』からの引用である可能性は高い。

また第13偈の pāda c と d の間に挿入された1偈<sup>(11)</sup>は、『サマーヨーガ』が金剛・蓮華・摩尼(宝)の3部のみを説くのに対し、種々 viśva・剣 khadga・輪 cakra と降三世を加えて7族とするため、第13偈を改変して挿入されたと推定される。

なお種々とは羯磨金剛 viśvavajra を三昧耶形とする『初会金剛頂経』の羯磨部、剣は『秘密集会』の羯磨部、輪は『秘密集会』の如来部のシンボルである。したがって『金剛場莊嚴タントラ』は、羯磨部が未発達であった『理趣経』の延長線上にある『サマーヨーガ』に羯磨部を補うため、この1偈を挿入したと考えられる。しかも羯磨部のシンボルとして羯磨金剛と剣を重複させたのは、『金剛場莊嚴タントラ』の編者が、『初会金剛頂経』と『秘密集会』の象徴体系の相違を知っており、これら両説をともに取り入れたことを暗示している。

したがって『金剛場莊嚴タントラ』と『サマーヨーガ』の同一偈は、『金剛場莊嚴タントラ』の編者が、『初会金剛頂経』『秘密集会』を参照しつつ『サマーヨーガ』の欠を補ったものであり、『サマーヨーガ』は『金剛場莊嚴タントラ』に先行するという結論が導き出される。

これは瑜伽タントラである『金剛場莊嚴タントラ』が、最初期とはいえ無上瑜伽母タントラに属する『サマーヨーガ』より成立が遅れることを示しており、注目に値する。

また『ラグサンヴァラ』『サンプタ』『ヴァジュラダーカ』『金剛場莊嚴タントラ』の引用は相互にほとんど一致せず、それぞれのテキストが別個に『サマー

## 『サマーヨーガ』と『金剛場莊嚴タントラ』

		Sarvabuddhasamāyoga	LST	SPU	VDT	VMA
第1偈	a	rahasye parame ramye	2c	1a	1a	1a
	b	sarvātmani sadā sthitaḥ/	2d	1b	1b	1b
	c	sarvabuddhamayaḥ sattvo	3a	1c	1c	1c
	d	vajrasattvaḥ paraṃ sukham//	3b	1d	1d	1d
第2偈	a	asau svayambhūr bhagavān	3c		2a	2a
	b	eka evādhidaivataḥ/			2b	2b
	c	sarvabuddhasamāyoga		4c		2c
	d	ḍākinījālasaṃvaram//	3d	4d		2d
第3偈	a	na rāgo na virāgaś ca			3c	3a
	b	madhyamā nopalabhyate/			3d	3b
	c	sarvastrīmāyāmudreyam			4a	3c
	d	advayaśāntam uttamam//			4b	3d
第4偈	a	sarvāsām eva mātṛānām				4a
	b	strīmāyāiva viśiṣyate/				4b
	cd					4cd
第5偈	ab					5ab
	c	duścāriṇyo'pi sidhyante		6c	4c	5c
	d	sarvalābhasukhotsavaib//		6d	4d	5d
第6偈	a	sarvastrīmāyā siddham		6a		6a
	b	svarūpaparivartanaiḥ/		6b		6b
	c	vicitramāyāmudreyam		7a		6c
	d	ḍākinīti ca mleccayā//		7b		
第7偈	a	ḍau vaihāyasi gamane		7c		
	b	dhātur atra vikalpitaḥ/		7d		
	c	sarvākāśacarā siddhir		8a	4e	
	d	ḍākinīti prasidhyati//		8b	4f	
第8偈	a	sarvato viśvamudrā tu		8c	5a	7a
	b	sarvato viśvasamvaraiḥ/		8d	5b	7b
	c	sarvabuddhasamāyoga			5c	7c
	d	ḍākinīti prakīrtitā//				
第9偈	a	ḍau vaihāyasi gamane				
	b	buddho dhātuḥ prakalpitaḥ/				
	cd					

『金剛場莊嚴タントラ』の成立とインド密教史上における位置

		Sarvabuddhasamāyoga	LST	SPU	VDT	VMA
第10偈	ab	sukhaṃ śam iti cākhyātam				
	cd					
第11偈	a	sarvatra sarvataḥ sarvaṃ				8a
	b	sarvathā sarvadā svayaṃ/				8b
	c	sarvabuddhādīsthiracalaḥ		4a		8c
	d	sarvabhāvo bhavaty asau//		4b		8d
第12偈	ab					9ab
	cd					10ab
第13偈	a	vajraṃ vajradharaś caiva		8a		11a
	b	padmaṃ padmadharas tathā/		8b		11b
	c	mañir mañidharas caiva		8c		11c
[挿入]	d	[viśvaṃ viśvadharas tathā//]				11d
	a	[khaḍgaḥ khaḍgadharas caiva]				12a
	b	[cakraṃ cakradharas tathā/]				12b
	c	[trilokavijayaś caiva]				12c
第13偈	d	bhavanty eṣāṃ kulāni ca//		8d		12d
第14偈	ab					13ab
	cd					13cd
第15偈	ab					14ab
	cd					14cd
第16偈	a	evam ādyair anantāgraiḥ				15a
	b	dharmadhātusamāsamaḥ/				15b
	c	ākāśadhātuparyantaiḥ				15c
	d	sarvabhāvo bhavaty asau//				15d
[挿入]	a	[asau hi bhagavān yogaḥ]		2a		16a
	b	[eka evādhidaivataḥ/]				16b
第17偈	a	sarvākāśāvakāśe śrī				16c
	b	vajrasattvas tathāgataḥ/				16d
	cd					

ヨーガ』を参照していることもわかった<sup>(12)</sup>。

- 1 *Śrī-sarvabuddha-sama-yoga-ḍākinījāla-sambara-nāma-uttaratantra* (北京 No.8)
- 2 福田亮成『理趣経の研究－その成立と展開－』(国書刊行会, 1987年) pp.499-500.
- 3 拙稿『『一切佛集會拏吉尼戒網瑜伽』所説「九味」再考』(『印度学仏教学研究』41-1, 1992年)
- 4 拙著『インド・チベット曼荼羅の研究』(法藏館, 1996年) pp.195-211.
- 5 北京 No.123, Vol.5, 216-24～3-6.
- 6 *Tantrarāja-śrī-laghusaṃvara-nāma* (北京 No.16)
- 7 その1偈半は, *Cakrasaṃvaratantram with the vivṛti commentary of Bhavabhaṭṭa*, Vol.1, Sarnath 2002では第2偈の pāda cd から第3偈に相当する。
- 8 杉木恒彦「A Critical Study of The Vajraḍākamahātantrarāja (I) — Chapter.1 and 42. —」(『智山学报』第51輯, 2002年)
- 9 Tadeusz Skorupski: The Samputa-tantra, Sanskrit and Tibetan Versions of Chapter One, The Buddhist Forum, Vol.4, 1996.
- 10 表では, 他のテキストから復元した『サマーヨーガ』の偈を左に示し, 『ラグサンヴァラ』(LST), 『サンブタ』(SPU), 『ヴァジュラダーカ』(VDT), 『金剛場莊嚴タントラ』(VMA) と対照させた。なお偈は LST を除き, 『サマーヨーガ』の第1章第1偈 pāda a に対応する pāda を 1a として番号を付した。
- 11 この1偈は, サンスクリット写本が伝存する『ラグサンヴァラ』『サンブタ』『ヴァジュラダーカ』の何れにも見られないが, 第13偈を参考にしつつ増補しているので, 表で [ ] の中に入れたように復元できる。
- 12 唯一の例外は, 『サマーヨーガ』にない『金剛場莊嚴タントラ』の16a が『サンブタ』の2a に一致することであるが, *asau hi bhagavān yogaḥ* の語は『サマーヨーガ』の他章に見られるので, 『サンブタ』が『金剛場莊嚴タントラ』を参照したかどうかは確認できない。

## [5] 漢訳対応部分に現れる教理概念

『金剛場莊嚴タントラ』の特徴の一つとして, 種々の教理概念を列挙し, その真言を説くことが挙げられる。この部分は, 福田教授の分科では末尾の第16

章に相当する。またこの一節は『金剛場莊嚴般若波羅蜜多教中一分』に相当し、施護がこの部分のみを訳出したのは、その教説が本タントラの特徴と考えられていたことを示唆している。

ここに列挙される教理概念については、福田教授によって漢・蔵両訳の異同が明らかにされている<sup>(1)</sup>。さらに福田教授は、これらの命題が、そっくり玄奘訳『般若理趣分』に見られることも指摘したが、これらの教理概念は『般若理趣分』で清浄句の後に付加されている<sup>(2)</sup>ものの、『理趣分』以後の漢訳には全く継承されていない。そこでこれらの教理概念を、表に整理してみよう<sup>(3)</sup>。

まず漢訳に説かれる20種の教理概念のうち、1. 四念処・2. 四正断・3. 四神足・4. 五根・5. 五力・6. 七覚支・7. 八正道の7種は、三十七菩提分法を構成する七科に一致する。なおチベット訳では教理概念が26種となり、三十七菩提分法の5. 五力と9. 七覚支の間に、6. 四梵行・7. 四無礙解・8. 三三摩地（＝空・無相・無願）が挿入されているが、漢・蔵両訳の何れにも三十七菩提分法を構成する七科は、すべて含まれている。

また三十七菩提分法以外では、八解脱・九次第定・十自在・十力・四無所畏・四無礙解・十八不共法と、『現觀莊嚴論』所説の二十一種無漏智 *zag pa med pa'i ye śes sde tshan ni śu rtsa gcig po* に摂せられる教理概念が多く含まれることが注目に値する。なお二十一種無漏智とは、『現觀莊嚴論』「法身章」において智法身の構成要素とされるものである<sup>(4)</sup>。いっぽう『金剛場莊嚴タントラ』のチベット訳のみに見られる三十二相と八十種好は、『現觀莊嚴論』「法身章」では報身の特相とされている<sup>(5)</sup>。

この二十一種無漏智の典拠は、『二万五千頌般若經』「法身章」<sup>(6)</sup>において、21種の無漏法が説かれることに求められるが、羅什訳『大品般若經』（大正 No.223）や玄奘訳『大般若波羅蜜多經』（大正 No.220、第二分）には、対応する經文を見出すことができない<sup>(7)</sup>。

しかし玄奘訳の「第二分譬喩品」には、四念住から十八不共法にいたる法



『金剛場莊嚴タントラ』所説の教理概念

『金剛場莊嚴タントラ』		『般若 理趣分』	『大般若經』 所説の無漏法	『現觀莊嚴論』 二十一種無漏智
漢訳	チベット訳			
1.四念処	1.dran pa ñe bar b'zag pa b'zi	①四念住	①四念住	①三十七 菩提分法
2.四正断	2.yaň dag par spoň ba b'zi	②四正断	②四正断	
3.四神足	3.rdzu 'phrul gyi rkaň pa b'zi	四神足	③四神足	
4.五根	4.dbaň po lña	五根	④五根	
5.五力	5.stobs lña	五力	⑤五力	
6.七覺支	6.byaň chub kyi yan lag bdun	七等覺支	⑥七等覺支	
7.八正道	7.'phags pa'i lam yan lag brgyad	八聖道支	⑦八聖道支	
8.三三摩地	8.tiň ñe 'dzin gsum	③空解脫門	⑧三解脫門	
		④無相無願		
9.八解脫	9.rnam par thar pa brgyad	⑤八解脫		③八解脫
		⑥八勝処		⑥八勝処
10.九次第定	10.mthar gyis gnas pa'i mñam pa ñid kyi sñoms par 'jug pa dgu	九次第定		④九次第定
		十遍処		⑤十遍処
11.六念	11.rjes su dran pa drug			
12.菩薩十分位	12.byaň chub sems dpa'i gnas pa bcu	⑨⑩淨觀地等		
13.菩薩十自在	13.byaň chub sems dpa' rnam kyi dbaň bcu			⑫十自在
14.十波羅蜜多	14.pha rol tu phyin pa bcu		⑨六到彼岸	
15.十地	15.sa bcu po	⑦⑧極喜地等		
16.四梵行	16.tshaň pa'i gnas pa b'zi	⑩慈悲喜捨	⑩慈悲喜捨	②四無量
		⑪六神通	⑪六神通	⑨六神通
17.十力	17.stobs bcu	⑫如來十力	⑫十力	⑬十力
18.四無所畏	18.mi 'jigs pa b'zi	⑬四無所畏	⑬四無所畏	⑭四無畏
19.四無礙解	19.so so yaň dag par rig pa b'zi	四無礙解	⑭四無礙解	⑯四無礙
20.十八不共法	20.24.saň rgyas kyi chos ma 'dres pa bco brgyad	十八不共法	⑯十八不共法	⑰十八不共法
	22.byaň chub sems dpa' rnam kyi rnam par g'zag pa bcu			
	25.skyes bu chen po'i mtshan sum bcu rtsa gñis	⑰三十二相		報身の特相
	26.dpe byad brgyad bcu	⑱八十隨好		

が無漏法であると明記されており<sup>(8)</sup>、「初分」の対応する箇所では、その内訳が、三十七菩提分法を構成する七科と、三解脱門・六到彼岸・五眼・六神通・十力・四無所畏・四無礙解・大慈大悲大喜大捨・十八不共法であるとされている<sup>(9)</sup>。そしてこれらのほとんどは、『金剛場莊嚴タントラ』に説かれる教理概念と重複している。(表参照)

したがって『金剛場莊嚴タントラ』所説の教理概念は、『般若経』所説の無漏法に由来し、『現觀莊嚴論』に基づく後期大乘仏教教学では、智法身の構成要素として重視されたものに相当する。これらは何れも、それを修することによって解脱等の果を得ることができるため、神聖なものとされ、密教においても修習の対象とされたのであろう。

またこれら一連の教理概念を、『金剛場莊嚴タントラ』が「無漏因正慧」zag med śes rab bdag<sup>(10)</sup>と讃歎することも、この推定を裏づけるものといえる。

なお『般若理趣分』には対応するチベット訳がなく、『金剛場莊嚴タントラ』が成立した8世紀後半のインドで、どの程度流布していたか定かでない。したがって、これら一連の法数が『般若理趣分』を経由したか否かの判断は難しいが、『般若経』に由来する教理概念が『金剛場莊嚴タントラ』において重要な役割を果たしていることは確認できる。

そして『現觀莊嚴論』に基づく般若学を大成したハリバドラが、パーラ王朝のダルマパーラ王と同時代で、ブツダジュニャーナパーダの師とされる<sup>(11)</sup>ことも興味ふかい。

1 福田亮成『理趣経の研究－その成立と展開－』（国書刊行会、1987年）pp.123-125.

2 大正 No.220, Vol.7, 987a.

3 表では、左欄に施護訳、『金剛場莊嚴タントラ』のチベット訳に現れる教理概念を挙げ、これを『般若理趣分』冒頭の清淨句、『大般若経』「初分菩薩品」に説かれる無漏法、『現觀莊嚴論』「法身章」所説の二十一種無漏智と対照させた。

4 真野龍海『現觀莊嚴論の研究』（山喜房仏書林、1972年）p.248.

- 5 真野上掲書 p.252.
- 6 *Pañcaviṃśatisāhasrikā-prajñāpāramitā* (北京 No.5187), Vol.90, 3-4-4~5-1.
- 7 梵文『二万五千頌般若經』の当該箇所は「法身章」の冒頭であるから、羅什訳では「四摂品」、玄奘訳では「第二分衆徳相品」の冒頭部分に相当するが、対応する經文を見出すことができない。
- 8 大正 No.220, Vol.7, 59c.
- 9 大正 No.220, Vol.5, 262c.
- 10 大正 Vol.18, 511c; 北京 Vol.5, 221-4-8~5-1.
- 11 Debiprasad Chattopadhyaya: *Tāranātha's History of Buddhism in India*, Simla 1970, pp.277-278.

## [6] まとめ

本稿では、従来『理趣広経』の異本とされてきた『金剛場莊嚴タントラ』の成立について、文献・図像・教理の各方面から検討を加えてきた。

その結果、『金剛場莊嚴タントラ』の成立年代は8世紀後半に置くのが妥当であると判明した。したがって本タントラは、中期密教系の瑜伽タントラに属するにもかかわらず、『秘密集会』『サマーヨーガ』などの初期の無上瑜伽タントラより、成立が遅れる可能性が高い。また本タントラの註釈者プラシャーンタミトラが、本稿で参照した『サマーヨーガ』『マヤージャーラ』の両タントラにも註を著している<sup>(1)</sup>ことは偶然とは思われない。この事実、これら3篇が、ブッダジュニャーナパーダ・プラシャーンタミトラ師弟と、とりわけ深い関係をもつことを暗示するものといえよう。

われわれインド密教の研究者は、従来から『理趣経』『金剛頂経』などより成立の遅れる『金剛頂経』系の密教聖典を、漫然と「後期瑜伽タントラ」等の呼称で呼んできた。『金剛場莊嚴タントラ』は、まさにその典型例であるが、後期瑜伽タントラの定義と性格については、従来ほとんど論じられたことがなかった。そこで本稿で行った考察をもとに、何をもって瑜伽タントラの初期と

後期を判別するかについて、私見を述べてみたい。

まず成立年代に関しては、8世紀前半までに成立していたものを初期、後半まで成立が遅れる可能性が高いものは後期としたい。とくに『十八会指帰』に記述があり、その内容が現行テキストと一致する場合、746年までにその中心部分が成立していたことになるので初期の瑜伽タントラといえる。

いっぽう尊格体系では、『理趣経』系は十七尊曼荼羅や八大菩薩、『初会金剛頂経』系は金剛界三十七尊というように、他のタントラの尊格群を交えていないものは、初期瑜伽タントラといえる。本タントラは、『理趣経』系でありながら金剛界の十六大菩薩を説き、さらに『秘密集会』系の四仏母も取り入れているから、尊格体系の上でも明らかに後期瑜伽タントラといえる。

なお筆者は以前に、福田教授の分科では第15章となる「般若波羅蜜多の曼荼羅生という廣大儀軌」における曼荼羅の配列が、『理趣経』系の八大菩薩が増広されて十六大菩薩が成立したプロセスを反映していると指摘した<sup>(2)</sup>。この事実自体は誤りではないが、タントラの成立が8世紀後半まで下がると、当該箇所を十六大菩薩成立の直接的ソースと見ることはできなくなる。これも『理趣経』系でありながら金剛界の十六大菩薩に言及する本タントラの内容上、十六大菩薩のうち『理趣経』系の八大菩薩に含まれない菩薩の儀軌を、どこかに一括して収録する必要があったからと思われる。

後期瑜伽タントラは、『チベット大蔵経』に多数のテキストが収録されるにもかかわらず、葬送儀礼に用いられて広く普及した『悪趣清浄タントラ』を除いては、サンスクリット原典が伝存しない、そのため従来は、その重要性が過小評価されていた面が否めない。しかし本稿で見たように、後期瑜伽タントラには、インド密教発展の謎を解明する重要なヒントが隠されているのである。

筆者はこれからも、文献・図像・教理の各方面からインド密教史の解明に取り組んでゆきたいと考えている。

- 1 *Sarvabuddha-samayoga-pañjikā* (北京No.2535) ; *Māyājāla-tantrarāja-pañjikā* (北京No.3337).
- 2 拙稿「金剛界曼荼羅の成立について (一)」(『印度学仏教学研究』 30-1, 1981年)